

238

平沼騏一郎と久原房之助

城

特254

298

隱士著

錢拾價定

1



0005035000

0005035-000

特254-298

平沼騏一郎と久原房之助

城北隱士・著

大文字書院

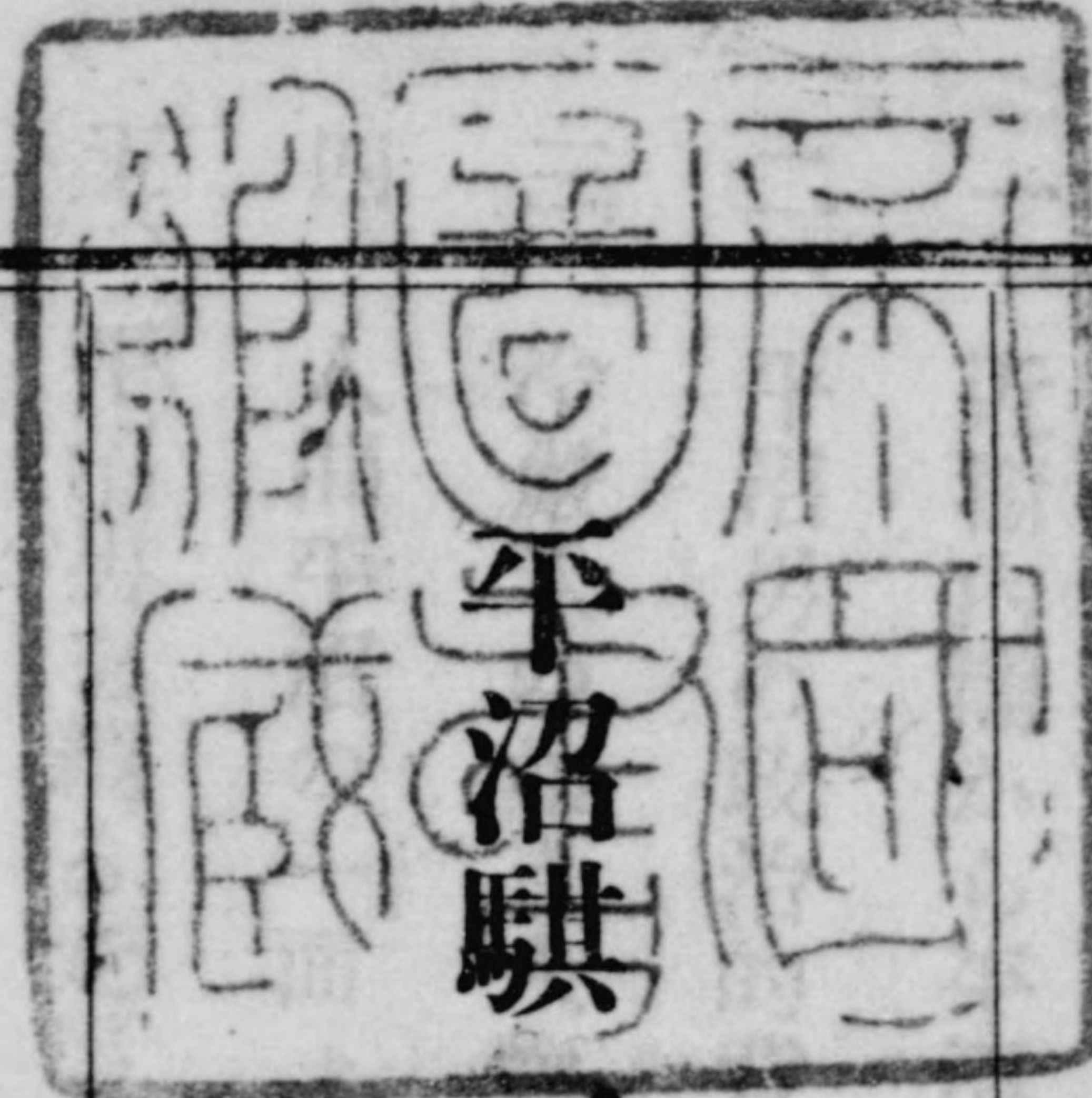
昭和14

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

特254
298

城北隱士著



郎と久原房之助



東京・大文字書院・發行

目次

- 一、近衛内閣から平沼内閣へ……………(三)
- 二、平沼男の政治的背景……………(五)
- 三、冷厳氷の如き人物か……………(八)
- 四、人間平沼の一面……………(二二)
- 五、平沼男を繞る走馬燈……………(二四)
- 六、最後の登場者……………(二九)
- 七、怪物久原の面目……………(三三)

八、彼れの信念は何か……………(三五)

九、總裁問題と久原……………(三九)

一〇、政局新段階と久原……………(三三)

四、大隈平沼の一面……………

三、命難水の時を人辭……………

二、平沼長の遺留の背景……………

一、近衛内閣から平沼内閣……………

目次

一、近衛内閣から平沼内閣へ

近衛内閣から平沼内閣へ、事變下の政權リレーは極めて圓滑に行はれ、非常時以來の政變につきまとつた息苦しい摩擦波瀾のそれとは凡そ異つた相貌を見せた。元來、戦争最中の政變は極力避くべきであることは云ふまでもない。それ故にこそ近衛内閣の成立以來一年有餘の間に幾度か近衛引退説が傳へられたに拘らず、重臣層をはじめ軍部、政界を擧つてこれが引止め激勵に努め、政變の危機はその都度解消されて來たのであつた。

然るに近衛公は十一月三日聲明、續いて十二月二十二日聲明に闡明された如く、事變が全く長期建設の新段階に入つたこの際を機會として、第七十四議會に入るに先ち勇退を決行し、新内閣と更替することに依つて民心を一新し新たなスタートを切ることが、臣節を完うする最善の途だと固く決意した。

即ち十二月二十二日の聲明以後、近衛公のこの意思は重臣方面や閣僚その他側近に向つて披瀝され、茲に年末より年頭にかけて慌しい政界上層部の往來が展開されたのであつた。

その當時、新聞はこれらの消息について政變來とは書かず、内閣の強化と云つたが、勿論その内閣の強化が、これまで近衛首相によつて行はれた内閣改造による強化工作とは性質を異にするものであることが充分推察されてゐた譯である。而して政界巨頭間の往來が近衛首相、湯淺内府それに平沼樞相を中心として行はれてゐる事實から見ても、次期政權の落着くところが奈邊にあるかは略ぼ推察されたのである。

この聞にあつて、近衛公引止めのために最も奮闘したものは板垣陸相をはじめとして軍當局であつたやうである。戦争の直接擔當者として、軍當局が最も熱烈に近衛内閣の存續を希望し、政變を喰ひ止めようとしたのは素より當然のことであつたらう。

然しその努力も近衛公をして翻意せしめることは出来なかつた。近衛首相の桂冠已むなしとすれば、次ぎの内閣首班たるべきものは平沼男を措いて外にはない。斯くて首相のバトンは唯一

路、直線を描いて平沼男に渡つたのである。

二、平沼男の政治的背景

平沼男が政界の惑星としての存在はまことに久しいものである。既に昭和年初のころに於いて平沼男の存在は政黨政治界に無視されぬ一敵國の觀を呈してゐた。後に國本社を組織しその中心人物となるに至つて、愈々その政界惑星としての光芒を放ち、その周圍には人材が雲の如く蟄集した。

國本社の創立は、當時滔々として全日本を掩はんとする風潮をなしてゐた社會主義乃至は共產主義の非國家思想に對して毅然たる戦ひを宣し、飽迄も皇國の大本を明徴にし、これを發揚せんことを目的としたもので、勿論政治結社ではなく、一つの思想團體であり、精神運動の範圍を出るものではなかつた。併し滔々たる社會主義の浸潤に對して、自由主義に立脚する政黨政治が何

等爲すところなく、徒らに黨争にのみ耽つてゐる状態を痛嘆する氣分は各界各層に擡頭しつゝあつたから、これら各方面の愛國の士が翕然として國本社に参加し、鬱然たる革新勢力を形成するに至つたのである。

昭和七年四月、驟然たる政界非常時の波が漸く高からんとするころ、平沼男は國本社長として『日本革新の運動』に關する聲明を發表したが、その要旨は大體次ぎのやうなものであつた。

日本は一君萬民の國である。一君萬民とは、皇室を中心として國民全體がこれを輔翼するの意である。つまり、總ての國民が萬世一系の天皇を奉じ各その職分を盡して國家の最高目的の達成に努める。これが日本の國柄である。

我が大和民族は生命を愛する、而してその最も愛するところのものは、國家の大生命である。我が立憲治は基調をこゝに置いてゐる。天皇と國民との道德關係、國民相互の間における道德關係を明かにし、天皇を中心として萬民これを輔翼するところの政治は、我が道德的國家の永久要素である。

日本の是高的で目あるこの道德の遂行は、國內に限られるものではない。總ての外國と共存共榮の實を擧げ、これと共に道を樂むのが我が皇室と國民全體の希望である。殊に東洋の天地に平和を導き、東洋に生息する民衆の幸福、安寧を増進するのが日本の使命である。

國家の道德を維持するためには國力を充實することが必要である。立派な目的も國力これに伴はねば達成することが出来ぬ。國力は經濟的方面にも武備の方面にも充實が必要である。日本は古來尙武をもつて經綸の最重要のものとして來た。即ち尙武は國家の最高目標である道德の遂行に必要なからである。

これが國本社の日本革新の指導原理であつた。後に昭和十一年、平沼男が樞密院議長に親任されると共に、國本社は解散された。けれども、國本社の創立以來、これには實に多彩な人物が各方面から参加してゐる。例へば近衛公の如きも曾て國本社の一員であり、宇垣大將や池田成彬氏も名を列ねてゐた。其他平沼男の畑である司法畑は云ふまでもなく、内務畑その他の官僚や軍人財界、學界、政界等あらゆる部門の革新的人物が雲集してゐた。尤もこれらの人々が悉く平沼男

の一黨といふ譯ではなく、またその抱懐する革新の内容も格別ハッキリした一定のものはない。たことは事實であるが、とにかく一つの革新的傾向をもつものゝ集團として、自由主義、政黨政治に對する排撃氣運が高潮しつゝあつた當時に於いて殊に一世の注目をひき、この團體の主宰者たる平沼男が革新陣營にとつての一大魅力であり、現状維持陣營にとつての一大畏怖的のたことは容易に首肯されるのであらう。

三、冷嚴氷の如き人物か

平沼男は斯くの如く一方では革新陣營の魅力的存在であり、他方では現状維持陣營の畏怖的であつたと共に、世間一般と何となく陰氣な冷い人物であるかの印象をあたへてゐた。それが一般的な人氣が立たぬ重要な一原因をなしたことは争はれぬ事實である。

平沼男に對する斯様な一般的印象は、男の經歷そのものに由來することが鮮くないであらう。

平沼男は慶應三年岡山縣（舊津山藩）に生れ明治廿一年帝大法科を卒業し、大正十三年山本内閣の法相となるまでの間において、司法畑のあらゆる部署を経験したと云はれる位、司法官として終始し、司法官として最高の地位に達したのであつた。ためにその長期間に亘る、重要な司法畑の椅子の歴任からして、平沼男とその後輩との人的關係は實に廣汎多數に上り、司法部内未曾有の強大な、いはゆる平沼閥が自然出來上つたのである。現法相鹽野氏の如きも子飼ひの平沼系といはれ、近衛内閣の法相としては、平沼勢力を代表して入閣したものと云はれた位である。

大正十三年の山本地震内閣の倒潰とともに、平沼男は樞密顧問官となり、大正十五年同副議長昭和十一年議長に親任されて、今回近衛公と入れ替るまで其職にあつた。

つまり平沼男は司法畑生へ拔きの官僚であり、山本地震内閣の法相となつたとは云ふものゝ極めて短期間で、政治家として一般に接觸、馴染まれるまでには至らず、そのまゝ官僚の牙城たる樞密院に入つてしまつた。だから平沼男と親しく接觸した者こそ、男の温い人情味や、政治家としての識見を知ることには出來ても、一般にはたゞ「嚴無比」と云はれるだけの、冷いコチ／＼の官

僚的人物としか印象されなかつたわけである。

もう一つ平沼男が何となく陰氣な存在のやうに感ぜられたのは、男があつた歳まで獨身で通して来たことである。獨身者には何處か一抹のさびしさが伴ふ。まして最初から妻子をもたず、持たうともしないと云ふのは、何かしら普通の人間味に缺けたところがあるのではないかと云ふ氣がするさう云ふ人間味に缺けて居つて、人間を相手とする本當の政治が出来るか何うか、等といふ批評も自然生れて来るわけである。

ところが平沼男が終に妻をめぐらなかつた理由が、失戀の結果であるといふ話をきくと、一見死灰の如き平沼男も、其實は熱烈な血潮の持主であると云ふことが判る。平沼男若き日のその口トマンスは、いま詳細に知るを得ないが、男の令兄、故淑郎博士未亡人しげ刀自の談片から窺ふと、獨身の原因はたしかに最初理想の妻としてあこがれた女性に裏切られたためであるやうだ。とにかく平沼男の獨身生活は、男の私邸を訪問する者にとつても、何となく冷やかな、さびしい家庭の空氣を感ぜしめた。そこへ持つて来て平沼男がいつも端然と構へて、苟くも無駄口を叩

かぬと云ふ風であるから、冷厳堅氷の如しだとか、大理石で刻んだ智神の像の如しとか、まことに親しみにくい評が博へられ、これが一般の定評のやうになつてしまつたのである。

四、人間平沼の一面

冷厳氷の如しと云はれた平沼男の、首相としての政界初登場にインタビューした新聞記者連も、はじめて見る平沼男が案外な人なつつかさを持つてゐることを發見して、今更らこの人を見直す必要のあることを覺つた。

昭和十四年一月四日午後九時四十五分平沼男に大命降下、翌五日午後三時四十五分には組閣全く完了して、即日親任式は行はれ、初閣議を終つた後、平沼新首相は記者團と初の會見を行つたが、その會見の様子は凡そ左のやうな即らかな微笑ましいものであつた。

「お疲れになりませんか」

『少し疲れたね、昨晚歸つたのは三時で今朝は六時に起きた。三時間しか寝てゐないものね、平常は夜十二時ごろ寝て、起るのは六時半ごろだからなア』

『夜は讀書ですか』

『本を讀まんともないが、もう毎晩は讀めん、そんな勉強家ぢやないです、ウフ、、、、』

右手を頬にあて、平沼さんは七十三歳とは見えぬ血色のいゝ顔の相格を崩した。

『御健康は如何ですか』

『大丈夫のつもりだ。健康法つて別にやらん。弓はやるが昨今寒くて駄目だね、碁は好きだ、だがこれからは忙しいのであまり打てぬかも知れんなア』

茲でまた平沼さんは聲をあげて笑ふのである。

『酒や煙草は如何です』

『煙草は好きだ、和製ではチェリー、外國製ではウエストミンスターとか云ふのだ。葉巻もよいが吸ひすぎていかん。酒は呑めない。まア、猪口に三杯だね、この位なら食事がうまいから晩飯

のときにやることもある』

『今晚の祝宴にもやりましたか』

『うん、シャンパンカップで日本酒を一杯だけやつた。初閣議のときはシャンパンを抜くとか聞いてゐたが、今は非常時でそんなものはいけません、日本酒で十分です』

『總理になられての御心境は』

『この難局に大命を拜してたゞ恐懼してゐる次第です、自分は最後の御奉公の決心で全力をつくす覺悟です』

平沼さんはいつの間にか謹嚴な姿勢にかへり、両手をきちんと膝の上に置いてゐた。さうして

『私は總親和、總努力といふことをモットーにしてゐる。どんなことでも一致がなくては駄目で、第一線にある將兵の忠勇な働きはたゞ感謝のほかはありません、銃後の國民もあらゆる困苦に堪える覺悟が必要です』

と諄々として銃後國民の覺悟を説くのであつた。

斯くて平沼新首相は十一日、親任報告のため、伊勢参宮に赴いたが、往路の車中では一切新聞記者と面會を拒絶、側近の侍者や出迎へのため途中乗車した地方の役人とも殆ど口をきかず、終始黙々として只だ移り行く窓外の景色を眺めるのみであつた。さうして大廟参拜をすまし、歸路になつて始めて記者と會見、所謂車中談を發表した。こゝらが所謂謹嚴苟くもせぬ平沼男の面目といふべく、伊勢参宮から一旦歸つて、中一日かを置いて更めて西下、橿原、桃山に参拜したのも、これを本式とする平素の信念によつたものであると云ふ。

五、平沼男を繞る走馬燈

平沼男が革新陣營の巨頭して、急進的政策の抱懷者の如く見做され、一種の畏怖感を財界や政黨方面にあたへてゐたことは前述の通りであるが、今度いよ／＼平沼内閣が成立して見ると、斯くの如き畏怖は先づ全く解消したかのやうである。それが證據には、平沼内閣の成立以後、株式

市場は俄然反騰景氣に轉じて連日花形株の値上りを報じ、政黨はまた二名の大臣が政黨代表たる資格を以て入閣せしめられたのみならず、政務官も全部衆議員から探り、近衛内閣が、政府の一方的意見でゴボー抜きにしたのに反して今回は先づ政黨側に人選を任せて其中から採用される、また近衛内閣が政民兩黨はじめ各派の革新分子を集合して新黨を結成しようといつた氣構えを持つてゐたのに對して、平沼内閣は總親和を力説し國民再編成や新黨計畫などはやらぬと木戸内相の口から表面するなど、すべて政黨との妥協々調を方針としてゐるものとして頗る氣をよくしてゐる状態である。

これは平沼男に對してかね／＼強力革新政治を期待してゐた向きにとつては誠に意外な事實であつたらう、早くも平沼陣營そのものゝ中にすら、不満のつぶやきが起つてゐるとさへ傳へられる程であるが、平沼男がこれらの思惑に顧慮するところなく、独自の所信に邁進せんとしつゝあることは男が信念の人たる所以を如實に物語るものである。

平沼男は革新陣營の巨頭として定評されたのであるが、男自身、かなる革新的政策を持つてゐ

るかは何人も知らない。男の口から聞かれたものは常に、國體の本義と日本人の道を説くところの精神的抽象論だけである。具體的にいかなる政策を以て、その精神を政治上に具現化するかといふ問題に至つては、これまでに片鱗へんりんだも公知されたことはないのである。従つて平沼男が革新的の人物であるといふのは、西洋的自由主義に對立する日本主義イデオロギーの權化としての平沼男を見ての話であり、實際政治舞臺に於いて平沼男の勢力が高く評價されたのは、男の周圍に平沼系の人物が蝟集し、いはゆる平沼陣營を形成してゐたからである。平沼男自身の政策は全く未知數、只だ平沼男陣營けんえいに参加せる人物のうち、目星しい個人々々について、若し平沼内閣が出現した場合、それらの人々が入閣したならば、行はれるべき政策は斯うもあらうかと云ふことが想像されたに過ぎない。

然るに今回の新内閣成立に當つては、平沼系の人物として鹽野法相が留任した以外、書記官長に田邊治通氏が就任した位のもので、他に平沼系と目される有力人物は一人も入閣せず、依然たる在野政客として止まることゝなつた。

尤も現在純平沼系と目される大物としては前記の鹽野、田邊のほか勝田主計、樺山資英、二上兵治等の諸氏が數へられるけれども、現役として直ぐにも、入閣出来るやうな人物はあまり見當らないのが事實である。平沼男が近衛内閣に代る全く新しい顔觸れかほぶらを以て革新的な清新内閣をつくるとすれば、手を伸べて更らに廣い範圍から人材を求めなければならぬ。

會て五・一五事件や、二・二六事件の當時において、無力な現狀維持的内閣を排し強力な革新内閣を求める聲は澎湃ほうはいとして高まつたのであるが、その強力内閣の首班として革新陣營が第一に待望したのは、平沼男であり、その閣僚としては當時の世間が以て革新的人物と目するあらゆる有力人物が候補に擬せられた、併し平沼内閣は容易に實現せずして齋藤、岡田、廣田、林、近衛と數代の内閣が出来ては潰れつゝ、慌だしい非常時の波は移りつゝある間に、會て革新的有力人物と目され華々しく登場した人々も、或は傷いて退き、或期待外れの聲と共に淋しく葬られた者も尠くはない有様である。例にとるのは氣の毒のやうでもあるが、例へば廣田弘毅の如き、會て革新外交のホープとして囑目され、やがてその外務大臣は實現し、更らに飛躍して、首相とまでなつ

たのであるが、今日の廣田は果して如何。これを想へば誠に感無量なるものがある。而もそれは單に廣田弘毅のみではない。非常時の波瀾は實に多くの人材を或は浮き上らせると共に又た無残に水面下に引き沈めてしまつたのである。

斯様なわけで、今日の平沼男が全然新たな独自の内閣を組織するとしても、曾て數年以前に豫想されたやうな顔觸れとは餘程趣きを異にするものとなるであらうことは明かである。人物詮衡の範圍は非常に狭められてゐる。

それのみならず、いま一つ考へられるのは、平沼男は政變の度びに有力な首相候補として噂に上りながら、政權はつねに男の前を素通りし、男はその雅號「機外」の通り、政機の外に置き去りにされたかの觀を呈すること久しいものがあつた。このことはやがて、政治家としての平沼男の魅力を漸く減退せしめる理由ともなり、男の身邊から離れる者も次第に増加することゝなつた譯である。つまり平沼男の持ち駒はだんく減つて行つた。斯様な政治的境遇が男をして單に獨身であると云ふばかりでなく、また別趣の孤獨感にしみく浸らせたであらうことは充分に想像

しうるところである。

六、最後の登場者

平沼男は有力首相候補として一面から熱心に支持されながら、何うして久しく登場が遅れたかこれに就ては、平沼男があまりに革新陣營方面に人氣があるため、飛躍的革新を欣ばぬ元老重臣方面が平沼男の登場を敬遠したのであると解釋され、或ものはまた、西園寺公が平沼男を嫌つてゐるからだと言ふと簡単に説明し去るといつた有様である。一・一・二六事件の直後、即ち昭和十一年廣田内閣の當時に平沼男が樞密院の副議長から湯淺内府の後を襲つて議長に就任した際には、これで

愈々平沼男は政治舞臺から封じ込まれてしまつたのだと評判された。平沼男がその革新的人氣の故に、財界や政黨方面から一種の畏怖感を以て視られてゐたのは事

實であり、海外に對しても日本におけるファツシヨの巨頭として響いてゐたことは事實である。

そこで平沼男が首相として登場するには、國內の摩擦相剋、また對外關係への影響等に就ても、充分に考慮を拂ふ必要があつたであらう。これらの微妙な政治問題は、西園寺公と平沼男の間の好悪感情と云つたやうな問題とは全く別問題である。元老重臣としては、國家の大事を思ふ前に個人的感情などが念頭にあるべき道理はない。

未曾有の國內激動時代に際し、時局を擔當するに足る充分な貫祿と、重厚の資性とを有する政治家としては、先づ宇垣、平沼、近衛の三者以外にはないと云ふのが最近の状態であつた。各種の内閣が考慮され、又た實際に試みられて見た結果、結論はそこに集約されて來たのである。そこで先づ最近に試みられた宇垣内閣は流産に歸して全く失敗し、その反動的な作用として林内閣が出現したが、これが又た豫想以上の失敗ぶりを演じて引退つた。斯くして遂に近衛か平沼かと云ふことになつたが、此の際に於ては相剋摩擦を緩和することを第一として、平沼男は極力近衛公を推して自らは出馬を辭退したので、結局近衛公の登場を見ることになつた。

然るに近衛内閣は組閣後旬日にして豫期せざる支那事變の勃發に遭ひ、これが終局的解決に向

つて否が應でも邁進せねばならぬことになつたのである。戦時内閣としての體制を強化すべく、

近衛内閣はしばしば閣僚の入れ替へが行はれ、その末期に於いては、當初の顔觸れが半ば以上變化してゐた有様である。然もこの間、幾度か近衛公の内閣抛げ出し説も噂に上り、殊に徐州會戦後、内閣大改造が行はれる直前には政變の風聞が高かつたが、此際は平沼男も極力近衛公引止め

に努力し、その内閣大改造については蔭の人として重要役割りを演じたものである。ところが漢口廣東の完全掌握を機とし、事變が愈々第四期の段階に入るに伴ひ、近衛公が何うあつても内閣を更替したいと云ふ決意を固め、翻意しない以上は、今度こそ平沼男が登場するより他はない。宇垣の再起は到底考へられず、平沼男も辭して動かないと云ふことになると、差當り後繼内閣の物色は頗る厄介なものとなつて來る。

現に十二月十一日近衛公が大阪における演說會に臨み事變處理に關する政府の新聲明を發表する筈であつたのを俄かに、取止めとするや、早くも政變來の風説は飛んで、各種の次期政權が取沙汰されたが、その中には林銑十郎大將の再起説や、木戸内閣説、南内閣説、或は荒木内閣説、

寺内内閣説、鹽野内閣説、更らに板垣内閣説さへも唱へられると云ふ有様で、十指を屈するも足らず、何處に焦點を置いてよいか見當に迷ふ状態であつた。

これらの風説が結局ものにならず、平沼内閣が遂に出現することになつたのは、落付くべきところへ落付たものであり、また平沼男の組閣方針そのものは、時局に鑑み極力近衛内閣の延長内閣たる形式をとり、その施政の指導精神も、國民總親和、總努力を高く掲げて無用の不安を一掃することに努めたのは、平沼男に對する重臣層の期待に充分酬むたものであると云ふことが出来やう。

七、怪物久原の面目

昨年末、第七十四議會も目前に切近し、他方近衛内閣は國民再編成を企てたに拘らず何うやら前途多難を想はせ、政情何となく慌しい情勢を感知せしめつゝあつた際に、政友會の總裁問題は

再び再燃してたところへ、突如として、眞に思ひがけなく惑星久原が飛び込んで來たので、世間はしばしこの大芝居の成行きに興味をあつめた。ところが此の大芝居も、數日の間揉みに揉んだ揚句は結局もと／＼通りの現状維持に落付き、何のために久原が飛び出したのかサツパリ譯がわからぬやうな有様になつた。久原は何の成算があつて乗り出したのか。一應は失敗の幕切れとなつたが、今後更めて續演が開始されるのが何うか。その邊のことは依然として謎だ。怪物久原は果して何を考へてゐるのか。

久原自身に云はせれば、『世間は俺を無軌道といふが、それは違ふ。彗星は軌道なしと云ふけれども、これは只だ普通の星に比べてのことで、彗星にももつと大きな軌道があるのだ……』とその軌道があまり大きすぎる爲めに風俗には無軌道としか見えないかの様である。

久原の肚と實行力とは測り知れぬ厚味があるものとして、政界に恐れられること久しく、實際また彼れに一度接觸したほどの者は、いづれ申合せたかのやうに、何となく久原の人物の大きさを感ずると云つてゐる。この點は政友會内で久原と好一對の立場にある中島知久平なども同様で

黙つてゐながら人に一種の壓力を感じさせる。これは單に身體が大きいとか金持ちであるとか云ふ爲ではなく、唯だ金をバラ撒く位のことであれだけの威望は得られるものでない。

だが政黨内で、金櫃を握つてゐると云ふことが如何に有利なものであるかは申すまでもなく、それに人格識見が加はれば正に鬼に金棒といふわけである。現在の中島はそれであり、曾ての久原はさうであつた。

久原が昭和初年、田中大將を政友會に擔ぎ込んで總裁としたことは周知の通りであるが、そのために仕度金として注ぎ込んだ金は數百萬圓と云はれる。その後毎回の選舉のたびは申すに及ばず、平常の經常費についても久原が賄つた金額は大したもので、總計したならば此十年ばかりの間に數千萬圓に達するだらうと云はれてゐる。久原が例の二・二六事件の嫌疑が晴れて晴天白日の身となると共に、その政治活動の間に残した負債の整理に着手されたが、その額は數千萬圓の莫大な總額に上つてゐた。併しそれが悉く政治資金としてか、或は又た昭和初年の金融バニツクに際して久原の關係會社を救済するため個人的犠牲を負擔したため残した借金である事情が判明

し、債權者團も同情して大部分を捧引きにして和議を付立せしめたと云ふ民事法廷佳話まで傳へられてゐる。

二・二六事件で民間側被告の一人である鶴川哲也を隠匿したと云ふ嫌疑で囹圄の人となり、社會から隔絶されること一年餘り、この間に政友會内における勢力分野には大きな變動が行はれて久原勢力と云ふものは殆ど消滅してしまつた。加ふるに財力も到底昔日に比すべくもなく、普通なら此邊で全くの政界隱居に顛落してゐた筈である。ところが依然として怪物久原の存在價值を失はず、つねにその動靜が注目されてゐるのは、何としても彼れの人物の偉大さを語るものである。

八、彼れの信念は何か

久原が二・二六事件に引つかゝつたと云ふのも、それだけ彼れが時勢の赴くところを洞察し、

時勢の流れに密接にタッチしてゐたことを語るものである。

抑も彼れが昭和二年、財界から足を抜いて田中大將を推したて、政友會に飛び込んだのは、大陸問題を解決するのが主要な動機であつた。この結果として、田中内閣の下に企てられたのが有名な「東方會議」である。この企ては滿洲問題を一舉に解決し、對支關係、對ソ關係の大方針を決定せんとする歴史的な大企圖であつた。若し當時に於いてこれが遂行されてゐたら、後年の滿洲事變も起らずに済んだであらうと云はれるが、揣らずも張作霖の爆死事件によつて東方會議はオヂャンとなり田中内閣は瓦壞してしまつた。

この前後において久原は全力を田中首相の鞭達激衝に注ぎ、或るときには田中が食言したと云ふので、矢庭に椅子を振り上げて打つてかゝつた事もあるとの秘話も傳へられてゐる位だ。

滿洲事變の勃發以後は、久原は時局の要求を察して協力内閣の必要を説き、第二次若槻内閣の末期には民政黨の安達謙藏、富田幸次郎と呼應して政民協力内閣の實現を劃策した。ところが當時の犬養政友會總裁は、初めは久原の説に賛成してゐたが組閣の間際になつて周囲の意見に動か

されて終に單獨内閣を組織し、久原の意圖は空しく失敗に歸した。犬養を動かしたものは云ふまでもなく鈴木、鳩山の一門であつた。それ以後、久原は鈴木、鳩山系とは相容れぬ中となり、鈴木、鳩山系の自由主義的政黨分立論に對して、一國一黨論を展開するに至つたのである。

一國一黨論については、單に時流に乗る便宜論でなく、久原一流の日本主義政治哲理がある。それをかいつまんで見ると大體斯うだ。

二大政黨が分立して、交互に政權を授受するといふ政黨政治形式はイギリスを模範とするもので、大正十三年には加藤内閣が組織されて以來、日本でもこの政黨政治が行はれて來た。併し斯うした政黨政治は、政權爭奪のために政治を毒し、選舉を腐敗させ、巨額の政治資金を要するために政黨は財閥に膝を屈し、投票をかき集めるために低級な俗論に媚びねばならなくなる。これでは國家の悠久な發展は望むべからず、政黨は宜しく目覺めて、西洋模倣の自由主義を清算し、眞に日本的な國家使命を自覺しなければならぬ。

日本の國體は君民一體、忠孝一本にその本義がある。君は恐らく木の幹であつて、それから生

ひ茂る無数の葉が日本臣民なのだ。この生きた木の姿こそは、天皇が愛民の『まつりごと』を行はせられると共に臣民がこれを補翼し奉る我國體の姿である。

帝國議會は、政權争奪の舞臺から、國民翼賛機關としての、本來の任務に立歸らなければならぬ、議會は一切の政權慾と利益追求とを清算して、眞に正しき民意を代表して天皇の政治を補翼すべきものである。

即ち議會はその補翼の任務を力強く發揮すべく、積極的には政府に有効な進言と助力とを與へ消極的には政府の施政を厳正に批判し、鞭達し、若し政府が無爲無能ならばこれを嚴評して、その交代を促すのも議會の任務である。

久原の一國一黨論の根據は右のやうな日本の政治哲理に立つてゐる。それで彼れは、議會における政黨の對立と云ふことを否定し、『非常時以來、政民兩黨をはじめ皆一致して政府に協力してゐるからそれで好いではないか』と云ふ議論に對しても、『それがいけない。國家のため一致協力すると云ひ乍ら、政黨の分立を主張する理由が何處にあるか、分立を是認すること自體が矛盾

盾ではないか』とし、舉國一黨でなければいけないと云ふのである。

九、總裁問題と久原

久原は斯かる舉國一黨論の見地から鳩山式の自由主義政黨論の清算を目的とし、政友會内に於いて血みどろの抗争を重ねて來た。さうして昭和十三年夏、彼れが二・二六事件の嫌疑全く晴れて後、政友會總裁問題が燃上し中島、鳩山の一騎打ちが開始されたときにも、久原は鳩山の總裁就任に絶對反對の立場をとつてゐた。それが同年末再び總裁問題が再燃し來るや、突如身を挺して鳩山私邸に乗り込み、鳩山氏の總裁就任を懲慚したのだから何人も目を圓くした。

これについて久原自身は、『鳩山君も外遊から歸つてからは思想が大分變つて、僕等と大して違ひはなくなつた』と語つてゐる。併し乍ら、夏の總裁争奪戰以來、鳩山勢力に比して中島勢力が次第に強大となり、争つても敗ける形勢は明白であつたから、鳩山陣營は鳴りを潜めて居たと

ころだ。冬の總裁問題が再燃したのは、中島派の策動によるものである。斯様な實情であるところへ、久原が乗り出して「總裁を戦ひ取る気はないか」とケシかけて見たところで、おいそれと鳩山が起ち上れるものではない。鳩山の返辭は、「自分はいま總裁を戦ひ取る意志はないが、黨のために何分よろしく御配慮を頼む」と云ふ以外にはなかつた。それを聴くと久原は、今度は中島の許をたづねて、中島からも「宜しく御配慮を乞ふ」旨の一札をとり、斯くて矢繼早やに代行委員會や、總務會、諮問委員會といふやうに各種の機關を動員し、二夜も徹宵協議を重ねるなどの緊張場合を展開したが、結局全員一致の結論を得るに至らず、問題は又もや預りといふことになつてしまつた。

この結果から見ても、久原もヤキが廻つたのではないかとする批評もあちこちに擡頭してゐるやうである。即ち、久原は颯起をすゝめさへすれば鳩山は一も二もなく起つものと久原は信じたのではなからうか、久原か鳩山邸を引揚げて來てから「今の若いものは意氣地がないね」と語つた點から見ても何うもさう思はれる、さうだとすれば、久原は政友會内の實狀をあまり知らなすぎ

る久しく政界から隔絶され黨内に乾兒がゐなくなつたとは云へ、餘りに目先が暗すぎる、と云つたやうな批評である。

だが斯様な見解で簡單に片づけるには、久原は餘りにも多角的であり、尋常の尺度では測れない人物である。

久原は「自分が總裁になるつもりはない」と云つた。それは懸け値のないところであらう。だが推されれば就任せぬともあるまい。久原は望むところは、誰れが總裁になるにしても、此の際速かに總裁を決定して政友會の膠着せる現狀を打開する、そうして一國一黨への歩みを促進すると云ふのが、大局の狙ひであつたらう。

久原が何故に財界から政界に飛び込んだかに就いて、財界に居つて政治家を動かすよい政治を實現たさせたいと思つても仲々さうは行かぬ、それで自ら身を挺して政界入りをしたのであると云ふ述懐を語り、更らに、自分が政友會に入つたのは、民政黨と對立する二大政黨の一に入つて所謂憲政常道を踏まんとしたからではない、結局二大政黨、一黨になる經路に過ぎないと見て、

そこへ持つて行くために自分の信ずる政黨に籍を入れたのだ、と云ふ意味のこととも洩してゐる。

三二

これは實際政治家として踏むべき途である。中島知久平も政友會内で革新派を卒ゐて鳩山と争つてゐる。それ位ならば潔く政友會を分裂させて獨立し、他會派の革新派をも糾合して一大新黨でもこしらへたらよかり相なものだか、實際は仲々さうは行かぬ。下手をやれば國民同盟の安達總裁の二の舞を踏むやうなことになる。政友會内に飽迄もガン張つて、政友會そのものを所期の方向に引つ張つて行かうと云ふのが中島の肚であり、それ故にこそ、方向の違ふ鳩山には總裁は渡せないと云ふのである。

久原は既に政友會内の實勢力からは遊離してしまつた。そこで久原の爲すことは、勢力外の勢力として、政友會を一步でも舉國一黨の方へ推進するやうに働きかけることである。彼れが突如として沈黙を破り總裁問題に飛び込んだのも、何等かこの點に期するところがあつたものと察せられる。

一〇、政局新段階と久原

總裁問題は扱ておき、近衛内閣の國民再編成計畫に先立ち、これに先行する運動として久原の『國民協議會』運動があつたことは注目されて好い。

『國民協議會』案なるものは久原の持論たる一國一黨の組織方法を具體的に立案したものであるが、その内容は大體、例の三相會議の新黨樹立計畫が失敗に終つて、有馬農相、風見翰長が参加し、更めて國民再編成に出直すとなつたとき、政府筋から發表された一大國民協議會の組織案と酷似するものである。即ち既存の政黨のみならず、青年團、東郷軍人團、産業組合、産業報國聯盟、その他あらゆる全國的團體を網羅して、これから代表者を選出せしめ、舉國的な一大協議體をつくと云ふのであるが、これはやがて既成政黨の存在の影を薄くし、舉國一黨への前提段階となるものである。

、それ故に、既成政黨がこの國民再編成なる動向に猛反對の氣勢をあげるに至つたのは當然だが、然し既成政黨の解消、舉國一黨の實現といふことを目指して居るものの立場から云ふと、久原の狙ひは誤らなかつたと云ふことが出来る。

然し乍ら近衛内閣は政黨の反對氣勢と、『今更ら何の國民再編成ぞや』と云ふ一般世評に恐れをなしたか、國民再編成はいつの間にか政治的性質を骨抜きにした單なる精神總動員運動の擴充組織にまで緩和され、それすらも實行するのかもしれないか遂に有那無那の形勢のまゝ近衛の退却、平沼内閣の出現となつてしまつた。そうして新内閣の本戸内相は、組閣後早々に『國民再編成も新黨運動もやらぬ』とわざわざ言明したのである。そのみならず平沼首相は既成政黨をば近衛内閣以上に尊重する態度をとり、議會第一主義で臨む態勢をとつてゐるので、茲當分の間久原をはじめ新黨論者や舉國一黨論者は、政府筋をあてにすることは出来ぬ情勢となつた。

併し乍ら、政黨の現状打開といふことは、動かし難い時勢の要求である。政府が何ういふ態度

として捲き起つて來るものでないかぎり、眞に力強い頼もしい運動とはならない。

平沼内閣が摩擦相剋を恐れるのあまり、第一妥協苟合によつて徒らに事而れ主義を踏むやうなことがあると、却つてその反動氣運が一面に呼び起されぬものでもない。平沼内閣がこの間に處して如何なる政治手腕を示して行くかは觀物だが、また民間における久原の如き人物の動きも一層注目に値する譯である。

【完】

昭和十四年一月十九日印刷
 昭和十四年一月二十三日發行
 定價拾錢
 (送料三錢)

昭和十四年一月十九日印刷
 昭和十四年一月二十三日發行

定價拾錢 (送料三錢)

著者 城北隱士

發行人 池田弘次

印刷所 東京市小石川區指ヶ谷町一丁目 大森印刷所

發行所 東京市小石川區 駕籠町一八九

大文字書院

電話大塚(86)二〇三八番 振替東京五六一四三番

鐵道各驛ホームスタンド一手販賣 東京鐵道局公認 鐵道保養會

大取次店 昭和書房・新生堂書店・名古屋 川瀬書店・九州 菊竹金文堂 大坪惇信堂

387
655

大塚六郎 印刷書局・東京堂書店・名古屋 田端書局・大阪 藤竹堂書店 大塚印刷局
 東京堂書店 東京堂書店 東京堂書店 東京堂書店 東京堂書店 東京堂書店

發行所

東京市小石川區

大文字書局

附東京市小石川區一丁目三番
 電話大塚(三)二〇三八番

印刷所

東京市小石川區

發行人

大塚六郎

寄附者

東京市小石川區

昭和十四年一月二十三日發行
 昭和十四年一月十六日印刷

東京市小石川區

